



為石小学校の合言葉 「ためし 最高! ~ 地元で学び 地元を活かし 地元とともに行動する子ども ~」



学校だより

ためし

- 楽しく めあてをもって しっかり学ぶ
- 正しく めあてを しっかり守る
- たくましく めあてに向かって しっかり鍛える



←HPを登録
してください。

令和6年4月12日号

文責 上久木田雄二



筆箱のこと

私が子どもの頃は、入学のために買ってもらった文房具は、卒業するまで使うのが当たり前でした。昭和40年代ですので、まだまだ戦後を引きずっていたのかもしれませんが。

時が変わって、私が教員になったころは、いわゆる「バブル」で、大量生産・大量消費の時代と言われていました。

子どもの持ち物も高価になり、ブランドの服を着ている子どもが増えました。文房具も種類が豊富になり、子どもたちの消費意欲を刺激していました。

進級するたびに新しい文房具をそろえてもらう家庭も増え、その分「落とし物」や「持ち主不明のもの」が毎日のように教室に置き去りにされました。

ところで、子どもたちの持ち物を見ていて気になることがあります。

それは、筆箱です。1年生に入学するときには、確かに箱型のものばかりです。長さの揃った鉛筆が1本ずつついでに収められています。

しかし、1年たたないうちに、買い替える子どもがいるのです。箱型の筆箱が、そう簡単に傷むわけもなく、「ファスナー型」のものに取って代わられます。

このような現象は、本校だけではありません。多くの学校で同じような現象が起こるのです。

卒業するころには、箱型の筆箱を使っている子

どもを見つけるのが大変なほど、「ファスナー型」が大半を占めることとなります。

子どもたちにとって、ファスナー型のメリットは何だと思いませんか。

私の経験上、「ファスナー型」の原因は、「ペン」です。

決められた数以上の筆記具を買い、学習で使うという名目で学校に運ぶためには、大量に入る「袋」が必要となります。

結果、まだ使える箱型の筆箱を置き去り、「周りがみんな持っているから・使っているから」というおねだりにより、「ファスナー型」がメジャーとなるのです。

私は、1年生の時に買ってもらった箱型の筆箱を、卒業するときまで使い切るのが、物に対する礼儀だと思うのです。買ってもらった人への恩返しだと思うのです。

本校では、筆箱の中身を

えんぴつ	5本	赤鉛筆	青鉛筆
消しゴム	15cmの透明定規	ネームペン	

と決めています。箱型の筆箱に十分収まる量です。あえてファスナー型が必要になるものの量ではありません。

新学期です。この週末に子どもたちの筆箱を見てください。決められたもの以外のものが入っている筆箱は、子どもたちの集中力を削ぐことにつながります。トラブルの未然防止のためにも、筆箱を見直してみてください。

